私の戦争体験

小倉節子（三山・65歳）

昭和二十年、戦争もだんだん激しくなり、たしか三月六日頃だったと思いますが、東京の池上にばくだんが落ちました。シュルシュルシュルズドンというものすごい音に私はふるえてしまいました。あまりの恐ろしさにどうしても田舎に帰りたくなりました。

当時二十才だった私は、東京の池上の軍需工場で旋盤工として働いておりましたが、あの恐ろしい東京大空襲の前日の三月八日に、幾枚かの着物を背負って房総の富浦の実家に帰りました。実家では、父（当時六十二才）母（当時五十才）弟（当時十六才）と私の四人でくらすことになり、父と弟は漁業をしておりました。

私が帰省した翌九日の夜のことです。京浜地区から浅草の方に向けてB29やかんさい機がものすごい音をたてて大群をなして飛んでいくのが見えました。やがてあたりの空はまっかに燃え、東京がやられたのだなと思うと血の気のひく思いでした。母は、この空襲をみて、蒲田のよしえ（嫁いだ姉）がダメになってしまうといっては位牌を持っておろおろしていました。両国や平井あたりは防空壕の入口に包囲弾が雨のように落ちたとの話も聞きました。

富浦の大房岬は要塞地帯になっていて、いつも憲兵があたりを見張っていました。憲兵はものすごくこわく、ピリピリしていました。

私はその後軍需工場（木工所）で兵隊用の弁当箱をつくりました。鉄という鉄はすべて出してしまったので、弁当箱も木でつくったのです。飛行機の油もなくなり、松の根っこを掘って油をしぼり燃料にしました。立派な松も次から次へと切り倒され根が掘られていく様をみて不安になりました。

毎日毎日空襲警報が出され、こわくてこわくて生きたここちがしませんでした。列車に乗っている時、きじゅうそう射にねらわれトンネルの中に逃げたこともありました。列車からとびおりて竹やぶの中にかくれたこともありました。「空襲警報解除」といわれるとほっとしました。

食べ物は大根めし・いもめしで、さつまいものくきをかわかしておいてゆでてごはんの中に入れました。菜種の花も雑すいに入れて食べました。

富浦から木更津の近くの小古村に買い出しに行く途中、よくおまわりに物資をとりあげられました。着物や魚をもっていくと、米や大豆・いもと交換してもらいました。佐貫にすいかを買い出しに行った時、母のじよりの帯でつくったリュックサックをしょって行きましたが、そのリュックサックまでおまわりにとられてしまいました。また貨車にのって船橋まで毎日のように魚を売りに行きました。売り上げ金でやみ市で米や衣類等を手に入れて帰りました。途中、何度おまわりにとられたかわかりません。

またトイレは、ふきの葉っぱをかわかして使ったり、縄をはって用をたしました。生理用品もありませんのでボロで処理しました。そのボロもあればよい方で、女性としてこんなにあわれでつらいことはありませんでした。

はき物はゲタですが、ゲタの鼻緒がなく針金で鼻緒の代りにしたため痛くてはけなくて、素足で歩いた方が多かったです。

昭和二十三年、当時絹よりもめんの方が高かったのですが、結婚の時はやっとやみでふとん一組を手に入れ、あとは着物をほどいてなんとか作りかえもって行きました。

また、世の中も騒然としており、食べ物や着る物にこと欠く日々でありましたので、稲ドロボーや米ドロボーが続出しました。

これは、主人（当時二十三才）のことですが、特攻隊員だった主人は、飛行機にばくだんを積んで人間もろとも敵の軍艦につっこんで行くのですが、昭和二十年八月十五日、十二時三十分に突撃の命令を受けていたのですが、その同じ日の正午、天皇のことばがあり、そこで突撃が中止となりました。その三日後、都城から府中まで軍用機で上官と共に帰ってきたとのことです。

また昭和二十一年に亡くなった母から聞いた話ですが、アメリカ兵が波うちぎわにうちあげられ、そっと近くのお寺でほうむったということであります。

戦争を一度おこせば、敵も味方も傷つきます。二度とあの恐ろしい戦争をおこさないよう祈る日々であります。